一也之故、能感天地之氣、能感天地之氣之故、又有感天地之邪毒、邪毒者何也、是又氣也、氣者何也、是陰陽也、陰陽沴亂、爲邪爲毒、毒者何也、體物而有形、邪者何也、因氣而無形、其邪也毒也、有區別焉、譬猶百花之異芬芳、百藥之殊能毒也、邪毒不一、有萬不同、故感而傷人、能成萬狀之疾、疾雖萬狀、其本二也、曰內因、曰外因、所謂外因者、傷寒、痘痲疥之類是也、內因者癪癖狂癇勞極之屬是也、內因者陰陽內亂而應于外、外因者、陰陽外亂而感于內、皆陰陽之沴氣、合湊而成疾、經所謂氣合有形者也、寔變化之父母、生殺之本始、不可不審察也、但外因中、若傷寒者、無形之邪、時行于冥冥之中、不可視、不可察、故曰非君子固密、則難避矣、若痘痲癥疥者、有形之毒、可視可察、是以雖常人易避矣、何者觸之則疾、不觸則不疾焉、

〔奇魂一〕病源論　并病名考

神ながら興言せぬは古の習なれば、ましてかゝるわざは、何ともいはでやみなましと思へど、古書傳らざれば、據なきまゝに、漢籍をみれば、徒に穿鑿たる說のみ多くして、いと信がたくなん、さらばたゞに過んとすれば、習癖つきたるにか、其病源を論ねば、さすがにあかぬ心ちぞせらるゝ、故考るに、病源となる物三あり、一には神氣也、神氣と云は、大己貴命の御心より疫起り、本牟智和氣御子言問まさず、崇道天皇の靈より咳逆起り、倭建命、伊服山にて白猪に逢て御足腫たまひ、桓武天皇の、石上神の祟にて病たまひ、神武天皇の御軍、熊野にて神毒氣にて皆瘁し類、國神の荒にて、其國人病む等、いとも畏は、仲哀天皇の、天照大神の勅を信まさずして崩給し類也、〇略中二には自然成也、自然成とは、自事を犯にもあらず、物に傷るゝにも非、端なく惡事起り、其惡事の終には因と成て、其身にしては病となり、或は不祥子を生、或は子孫の血脈に傳て、種々の病となる類を云也、其ゆくりなく禍事の起れるは、准へむも畏こかれど、伊弉冉命の、火神を生ましゝに依て崩ましゝ類也、其惡事の因と成て不祥子の生るゝは、二神天之御柱を廻ます時、女言先立て、不良し